

<狩猟犬としての飼育・訓練法>

その1：飼育編

1. はじめに

ここで紹介する飼育編は、四国プリンス犬舎が約40年間に渡り実施して来た飼育管理法等について記載しております。タイトルには「狩猟犬」の文字が付いていますが、飼育管理法は家庭犬も同様に参考にして頂ければ幸甚であります。

2. 犬舎について

犬舎作りは、「冬は暖かく、夏は涼しい」が基本的な考えである。

犬舎は、ブーギー系アメリカンビーグルの系統繁殖を行って来た関係上、一般の犬舎より大きく作られており、縦：5m、横：13m、高さ：4m、床は3cm勾配のコンクリート、天井はスレート葺（暑さ対策として遮熱塗料を吹付）で仕上げている。

ケージは、飼育用と繁殖用の2種類（ステンレス製）を用いている。

3. 健康管理

健康管理は、以下に示した要領で実施している。

また、飼育管理作業の結果は、「飼養施設及び動物の点検記録台帳」に毎日記録し、5年間保管している。

※ 飼養施設及び動物の点検記録台帳とは？

動物取扱業者は、動物愛護管理法により、点検時間、飼育施設の清掃・消毒・保守並びに動物飼育数、健康状態等をチェックし（動物取扱責任者：当局への登録が必要）、記録することが義務付けられている。これに違反すると罰則が科せられる。

(1) 日常の飼育管理

◎一日の流れ

運動（早朝：30分）→犬舎の清掃・消毒→給餌給水→飼育記録の記帳→休息・・・→

運動（夕方：30分）→犬舎の清掃・消毒→給餌給水→飼育記録の記帳→休息・・・→

1) 運動（散歩）

運動は、朝夕の2回実施（雨天決行）している。

原則として夏は涼しいうち（午前5時頃から開始）、冬は暖かいうち（午後3時頃から開始）に行っている。この時に、一般症状の観察も同時に行う。

2) 犬舎の清掃・消毒

犬舎の清掃・消毒は、1日2回（朝夕）に実施している。

消毒は、次亜塩素酸ナトリウム（500倍）、塩化ベンザルコニウム（200倍）、

消毒用アルコールを消毒部位に応じて使い分けている。基本的に床、ケージ、食器等は、週1回の頻度で消毒している。

3) 給餌給水

給餌は、6カ月齢までは1日2回（朝夕）、それ以上は1日1回（朝）にドックフードに少量の水を加えて与えている。訓練犬や狩猟中は適時増やしている。給水は、新鮮な水道水を1日2回（朝夕）与えている。

(2) 一般症状の観察

○毎日：元気・食欲・飲水量・歩様・便・尿・毛・皮膚・嘔吐・呼吸など

○毎月：貧血・体重・体温など

<日常管理>

通常日常管理では、主に元気（眠りがち、運動を嫌う、直ぐ疲れる、痙攣する等）と食欲（食が細くなる、偏食する、異物を食べる等）について注意深く観察し、もしどちらかに異常が認められた場合には、以下の項目について更に詳しく観察する。

- ① 飲水量（飲まない、よく飲む、急に飲む量が増えて来た）
- ② 歩様（歩かない、よろめく、足をひきずる、背中を丸く曲げて歩く）
- ③ 便（便をしない、排便時にしぶる、軟便、下痢：水様・血便・緑便）
- ④ 尿（色：無色・黄色・茶色・赤色、醤油色、臭：強い、量：多い・少ない）
- ⑤ 毛（毛づやが悪い、汚れている）
- ⑥ 皮膚（赤く充血している、ただれている、脱毛している、フケが多い）
- ⑦ 目（涙が多い、充血している、眼やにが多い）
- ⑧ 鼻（乾いている、鼻汁が多い、くしゃみをよくする、鼻をグーグー鳴らす）
- ⑨ 口（臭い、歯茎が白い又は黄色い、声がかすれている）
- ⑩ 嘔吐（時々する、頻繁にする、白又は黄色い液が混じる、食後に吐く）
- ⑪ 呼吸（時々強い咳が出る、動くと直ぐ息が激しくなる、呼吸が非常に速い又は遅い）
- ⑫ 脈拍（胸に手を当てると動悸がある）
- ⑬ 体温（高い：39℃以上、低い：37℃以下、微熱が続く）

以上の観察の結果、症状がひどい場合は速やかに掛かり付けの動物病院に相談する。

※ 犬は話が出来ないので、飼い主が前述した観察結果を獣医師に伝えるとで、適切でスピーディな処置が可能となる。

(3) 疾病対策

犬の病気は大きく分類して、ウイルス、細菌、寄生虫及び原虫に起因する。

1) ウイルス・細菌

ウイルス及び細菌の感染により発病するもので怖いのは、ジステンパー、パルボ、犬伝染性肝炎、レプトスピラ等である。しかし、現在は効果の高いワクチンが開発されており、年に一回春先に接種すれば先ず問題なく予防できる。

※ レプトスピラとパルボは終生免疫ではないので毎年実施しないと感染する

ので注意が必要である。

2) 寄生虫

① 内部寄生虫

内部寄生虫には、回虫、十二指腸虫、鞭虫、条虫、フィラリア等があげられるが、条虫を除く消化器系寄生虫はフィラリアの予防薬の投与（6月～11月）で駆虫することが可能である。しかし、12月から5月までは3ヵ月に1回駆虫が必要である。また、仔犬は2ヵ月に一回の頻度で回虫と十二指腸虫を駆虫する。条虫については、一般市販薬では効果が無いので掛かり付けの動物病院に相談し投薬する。

※ 適切な駆虫は、犬の栄養状態を維持する上で非常に重要となる。幾ら高価な餌を与えても寄生虫に感染していれば何の意味もなさない。

② 外部寄生虫

外部寄生虫としては、ダニ、ノミ、シラミ等があげられるが、中でも猟犬としては訓練や狩猟中にダニ（マダニ）が付着するので、帰宅すると速やかにダニの殺虫を行う。そのまま放置しておくともダニは恐ろしいピロプラズマ病の原虫を保有している可能性があり、感染すると死亡に至ることが多い。

予防等については次の「原虫の項②」を参照のこと。

3) 原虫

当犬舎で特に注意しているのはコクシジウムとピロプラズマ（バベシア病）である。

① コクシジウム

これに感染すると犬は元気で食欲もあるが、食餌の後に軟便や下痢状便を毎日泄るので、よく水を飲むようになり、段々とやせ細っていくので、このような症状が認められる場合は速やかに掛かり付けの動物病院に相談し、適切な処置を行う。コクシジウムはサルファ剤の投与が有効である。

※ 通常の市販薬やフィラリア予防剤では駆虫できないので注意が必要である。

② ピロプラズマ

これはダニが媒介するので、猟犬は訓練や狩猟を通して感染する確率が高い。全国的には関西に発病例が多く、中でも九州や四国は多く、当犬舎も過去に3頭が発病し死亡している。ピロプラズマに感染すると顕著な貧血がみられ、口内が真っ白になり、非常に赤い尿を排泄する。犬舎内では比較的元気でも散歩に出すと直ぐに疲れ、“トボトボ”と歩くか、全く歩かなくなる。そして偏食がひどくなり管理も大変難しくなる。一旦感染すると適切な治療方法が無く、予防（ダニの駆除）を徹底するしか方法はない。最近では、ダニの予防薬（月に一回塗布）が開発されており、これを確実に実施することで予防は可能である。

※ このピロプラズマに感染すると、例え死亡に至らなくても猟犬としての使

用は不可能（激しい運動は不可）となるので注意が必要である。

（４）人畜共通伝染病

犬の人畜共通伝染病としては、狂犬病が最も怖い病気とされており、年一回の予防接種を受けることは愛犬家としての義務（常識）である。狂犬病の詳細については他に譲り、ここでは一般的なサルモネラ病、結核、ブルセラ病、レプトスピラ病、皮膚糸状菌病、トキソプラズマ病、イヌ回虫病等について記述する。

これらに感染すると次の様な症状が見られる。

- ① サルモネラ病：下痢、腹痛、嘔吐、発熱など
- ② 結核：発熱、衰弱、肺・腸・皮膚などの乾酪化など
- ③ ブルセラ病：微熱、頭痛、リンパ節腫脹など
- ④ レプトスピラ病：発熱、黄疸、出血、筋痛、胃腸障害、脳膜炎症状など
- ⑤ 皮膚糸状菌病：皮膚小水水泡、紅班、円形脱毛など
- ⑥ トキソプラズマ病：流産、リンパ節炎、黄疸、貧血、脳水腫など
- ⑦ イヌ回虫病：肝臓・脾臓・中枢神経系、筋などに仔虫迷入など

上記した症状が見られた場合は、速やかに病院で検査を受け、適切な治療を受ける。この様に記述すると気の早い人は「犬など危なくて飼えない」等と思う人がいるかも知れないが、正しい知識と適切な飼育マナーを守れば特に問題はない。

前述した人畜伝染病を予防するには、次の事項を励行する。

- イ. 飼い主がケガをしている時は、傷口が接触しないようにし、万一接触した場合は速やかに洗浄・消毒する。決して口移しなどで餌を与えてはならない。
- ロ. 犬に接触した後は、手洗いを励行する。
- ハ. 犬に異常な行動及び症状が見られる場合は、当該犬を別の場所に隔離し、速やかに掛かり付けの動物病院に相談し、適切な処置を行う。
- ニ. 犬舎及び飼育管理用具等は定期的に消毒する。
- ホ. 犬の日常健康管理（予防接種、症状観察など）を十分に行う。

特別な場合を除き、上記した五項目さえ実施しておれば、特に心配はないと思われる。

4. おわりに

当犬舎で実施している飼育管理の方法や飼育する為の基礎知識等を記載したが、初心者の方にいささか難しかったかも知れません。しかし、人犬一体となった楽しく有意義な生活を送るには、これらを周知することは当然の義務と考えたい。

適切な飼育管理の第一歩は、犬は話すことが出来ないことを自覚することである！